

留学生および日本人学生のインタラクティブな授業の試み

Designing a collaborative class for International students and
Japanese students

末繁 美和
ケーレブ・プリチャード
ジョン・ルシンスキー

Miwa SUESHIGE
Caleb PRICHARD
John RUCYNSKI

岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要

第1号 2016年12月

岡山大学高等教育開発推進室
岡山大学教育開発センター
岡山大学基幹教育センター
岡山大学学生総合支援センター
岡山大学グローバル・パートナーズ

留学生および日本人学生のインタラクティブな授業の試み

末繁 美和

ケーレブ・プリチャード

ジョン・ルシンスキー

Designing a collaborative class for International students and Japanese students

Miwa SUESHIGE

Caleb PRICHARD

John RUCYNSKI

要旨

本稿は、2016年4月から7月にかけて行った留学生対象の日本語クラスと日本人学生対象の英語クラスとの合同授業の実践報告である。計6回の授業において、発表、インタビュー、ディスカッション、協働でのプロジェクトを実施し、授業後にアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果から、これらの活動に対する学生の評価は高く、特に協働でのインタラクティブなプロジェクトが、お互いの交流や言語使用の機会を増やしたことが分かった。一方で、交流時に、言語に加え、性格や価値観、コミュニケーション・スタイルの違いによる問題があり、両者の関係構築および言語的なサポートを教師に求めていることが示唆された。

キーワード：合同授業，留学生，日本人学生，交流，協働

1. 問題の所在と目的

留学生30万人計画などを背景に、日本国内の大学における留学生の受け入れが増加しており、様々な背景を持つ留学生への日本語教育が求められている。しかしながら、日本語授業を主に履修する留学生は、同じキャンパスに日本人学生がいるにも関わらず、交流や日本語使用の機会に恵まれているとは必ずしも言えない。一方、日本人学生においては、グローバル人材育成の必要性から、近年、高い英語力の育成が課題に挙げられているが、日本にいながら、実践的な英語のコミュニケーション能力を育成することには困難を伴う。このような双方の問題を解決する1つの方法として、日本語を学ぶ留学生と英語を学ぶ日本人学生の合同授業が注目されている（安井 2008, 世良 2013）。

世良（2013）は、留学生が日本語母語話者と共に学ぶ授業形態には、次の3つのタイプがあると述べている。(1)「ビジター・セッション」「会話パートナー」のような形を取り、日本語学習者が主体であるクラスに母語話者をゲストとして迎えるもの、(2)「日本事情」「異文化理解」などの科目を留学生と日本人学生の両者に向けて開講するもの、(3) 英語や中国語などを学習するクラスと留学生のための日本語学習クラスとを合同して行うものの3つである。何れのタイプにおいても、留学生と日本人学生の交流は可能となるが、形態によって、相互の関わり方や頻度、学習言語の使用量は異なってくると考えられる。(1)に挙げられた「会話パートナー」のシステムは、岡山大学にもあるが、交流がその場限りで終わってしまいがちになることが問題点として指摘されており（守谷，2015）、コンスタントに同じ人と交流し、関係を構築することが難しい。また、(2)の留学生と日本人学生両方に向けて開講される授業においては、日本語或いは英語の何れかの言語で開講されている科目が多く、留学生または日本人学生の学びたい言語が使用できるとは限らない。(3)に挙げられた日本人向けの外国語の授業と留学生向けの日本語授業を合同で行うスタイルは、個々に開講されている授業を合同で開講するため、カリキュラムや開講時間の調整が難しいという問題がある。しかしながら、合同授業による効果を報告する研究は多く、日本語を学びたい留学生と英語をはじめとする外国語を学びたい日本人学生、双方のニーズを満たす理想的な授業形態であると考えられる。

では、このような合同授業において、どのような効果が期待できるのだろうか。合同授業の効果としては、交流の機会の創出、異文化理解の促進、言語学習へのモチベーションや意欲向上、教師の連携による教科間の理解促進などが報告されている（鈴木・島津 2002, 世良 2013）。また、Morioka et al. (2013) は、合同授業では、お互いに助け合うことで、自己効力感が高くなるとも述べている。一方で、安井（2008）は、合同授業に対するアンケートの結果、「日本語能力の向上」および「日本語力への自信」の評定の平均値が低かったことを報告しており、授業回数が少ない場合、日本語力の向上が実感できないという問題点を挙げている。また、「友達作り」の平均値も低かったことを報告しており、日本人学生との交流が授業に限られていたことを指摘している。

以上のように、合同授業により、留学生、日本人学生双方が得るものは大きいですが、一方で、授業の内容やスタイル、回数などによって、その効果は変わってくると言える。合同授業のスタイルには、会話やディスカッション、発表に加え、サービス・ラーニングのようなプロジェクトを協働で行うタイプのものもあり、多岐に渡る。それゆえ、それぞれの授業スタイルにはどのような効果があり、学習者がそれをどう評価しているのかを知る必要があると言える。

そこで、日本語および英語クラスの合同授業を、2016年4月から7月にかけて、計6回実施し、発表、インタビュー、ディスカッション、協働でのプロジェクトを実践した。本稿では、合同授業後に実施したアンケート調査の結果から、授業内容やスタイル、授業の効果などに対して学生がどのように感じ、何を求めていたのかを検討する。

2. 合同授業の概要

2.1 実施時期および授業内容

本実践は、2016 年 4 月から 7 月にかけて、計 6 回実施した。実施日と実施内容を表 1 に示す。7 月 12 日の授業は、60 分のみであったが、その他の授業は、1 回 120 分行われた。

表 1 合同授業のスケジュール

日にち	日本語クラスの内容	英語クラスの内容
5 月 10 日 (火)	自国の紹介 (ポスター発表)	発明した商品の CM 発表 (ポスター発表)
5 月 31 日 (火)	未来の製品の発表 (ポスター発表)	“How to...” (ポスター発表)
6 月 14 日 (火)	自国の大事件紹介 (ポスター発表)	インタビュー
7 月 12 日 (火)	「岡山大学を改善するための提案」についてのディスカッション	
7 月 19 日 (火)	「岡山大学を改善するための提案」を行うための調査、資料収集、発表準備など (プロジェクトワーク)	
7 月 26 日 (火)	「岡山大学を改善するための提案」の発表 (PowerPoint による発表)	

授業形態は、ポスター発表、インタビュー、ディスカッション、プロジェクトワーク（協働作業）、PowerPoint による発表の 5 つであった。5 月から 6 月までは、各クラスのトピックに関する発表やインタビューを合同授業で行った。そして、7 月に実施した 3 回の合同授業では、留学生 2 名、日本人学生 2 名のグループを作り、各グループにおいて、「岡山大学を改善するための提案」というテーマで、プロジェクトワークを行った。協働して調査や発表資料作りを行い、最後の合同授業にて、各グループ PowerPoint による発表を行った。

2.2 日本語クラスの概要

留学生対象の「日本語 3」のクラスにおいて合同授業を実施した。このクラスは中級入門レベルの 4 技能を対象とした総合クラスであり、教科書は『J.BRIDGE to Intermediate Japanese』を使用していた。23 名が履修しており、国別の人数の内訳は、米国 8、中国 3、英国 2、オーストラリア 2、ベトナム 2、ミャンマー 1、台湾 1、バングラデシュ 1、スリランカ 1、カナダ 1、マレーシア 1 であった。留学生の身分は、交換留学生や大学院生、研究生などであった。授業は、120 分授業が週に 4 回、計 59 回開講され、そのうちの 6 回において合同授業を実施した。週 4 回の授業は、2 名の日本語母語話者教師が 2 回ずつ担当しており、合同授業実

施日は、2名共出席した。

2.3 英語クラスの概要

プレゼンテーション・スキルを学ぶ日本人学生対象の「総合英語 5」の2クラスにおいて、合同授業を実施した。英語母語話者教師が1名ずつそれぞれのクラスを担当しており、合同授業の際には、2クラスを統合して実施した。履修者は18名で、TOEICのスコアは、400点程度であった。授業は、120分授業が週に1回、計16回開講され、そのうちの6回において合同授業を実施した。

2.4 合同授業の実施手順および教示方法

合同授業は、英語クラスの教室にて実施した。初回の合同授業で、自己紹介を行い、アイスブレイキングの時間を設けた。また、教師から、合同授業の目的を説明し、言語の練習だけではなく、お互いの文化や考え方を交換する機会である旨を伝えた。第1回から第3回までの合同授業では、日本語および英語、各々のクラスのトピックに関する発表や活動を行ったため、120分を60分ずつに分け、実施した。その際、日本語クラスの活動をする際は、原則として日本語、英語クラスの活動では、英語を使用するよう学生に指示した。ただし、意思疎通が難しい場合は、何れの言語の使用も可とし、お互いに交流することを優先させた。残りの3回の合同授業については、協働でプロジェクトワークをさせたため、最終発表の使用言語は、それぞれの学習言語を指定したが、作業時の言語使用については、学生に委ねられた。

2.5 アンケート調査

最終回の合同授業後に、アンケートを実施し、留学生17名、日本人学生16名の回答を回収した。留学生に対しては英語で、日本人学生に対しては日本語で実施した。アンケートは、19項目あり、7段階評価および選択式の設問、自由記述からなる。質問項目は、「合同授業に対する評価」「交流時の態度・異文化理解」「言語使用・言語能力の向上」「問題点・必要なサポート」の4つに分類される。それぞれの質問項目を表2に示す。

表2 アンケート調査の質問項目

カテゴリー	番号	質問内容
合同授業に対する評価	1	日本人学生と留学生が一緒に行う合同授業は良かったと思いますか。理由も書いてください。
	2	合同授業の内容に満足しましたか。
	3	良かったと思う授業内容を選んでください。
	4	どのような合同授業のスタイルが好きですか。

	5	第1学期と第2学期に数回合同授業をしましたが、回数はどうですか。
	19	また、このような合同授業があったら、そのクラスを履修したいと思いますか。
交流時の態度・異文化理解	6	合同授業の時、積極的に日本人 / 留学生と交流しましたか。理由も書いてください。
	11	合同授業を通して、相手の文化を学びましたか。
	12	相手の学習態度やコミュニケーション・スタイルで、勉強になったことはありますか。
	15	授業外で、発表の準備や交流のため、日本人 / 留学生と連絡を取りましたか。連絡を取った人は、連絡目的と方法も書いてください。
	16	合同授業で会った日本人 / 留学生と友達になりましたか。
言語使用・言語能力の向上	10	合同授業の時、日本語と英語のどちらをたくさん話しましたか。
	13	相手の言語能力をどう思いましたか。
	14	合同授業を通して、自分の言語能力（読む、聞く、話す、書く）が上がったと思いますか。
問題・必要なサポート	7	日本人 / 留学生と交流する時、言語の問題はありましたか。問題があった時、どうしましたか。
	8	日本人 / 留学生と交流する時、言語以外の問題はありましたか。
	9	合同授業の時の教師の説明は、分かりやすかったですか。
	17	合同授業の利点と問題点をそれぞれ書いてください。
	18	合同授業の時、教師や、日本人 / 留学生に、どのようなサポートをしてほしいですか。

3. 結果と考察

本稿では、「合同授業に対する評価」「交流時の態度・異文化理解」「言語使用・言語能力の向上」「問題点・必要なサポート」の順に、アンケートの質問項目の結果と考察を述べる。

3.1 合同授業に対する評価

まず、合同授業の内容や授業スタイルに対する評価について述べる。「日本人学生と留学生が一緒に行う合同授業は良かったと思いますか」という質問に対して、7段階評価（1：全く良くない～7：大変良い）させたところ、留学生 6.18、日本人学生 6.25 であり、両者共に、合同授業を肯定的に捉えていることが分かった。理由については、留学生からは、「日本語の練習ができる」、「日本人の友達が作れる」という意見が見られ、コミュニケーションの実践や友人

作りの場と捉えていることが窺えた。一方、日本人学生からは、「日本人と留学生の発表の雰囲気の違いが違ってとても参考になったし、刺激になった」、「本物の英語と触れ合えた」という意見があり、母語話者の英語に触れられたことだけではなく、留学生の発表技術や授業態度からも多くのことが学べたようであった。

次に、「合同授業の内容に満足しましたか」という質問においては、留学生 5.73、日本人学生 6.06 であり、満足度が高かったことが分かった。また、「留学生と日本人学生が個々に準備する発表」「留学生と日本人学生と一緒に準備する発表」「ディスカッション」「プロジェクトワーク」という 4 つのスタイルに関して、7 段階評価（1：全く良くない～7：大変良い）を行い、授業スタイルの違いにより評価が異なるのかを分析した。その結果、ディスカッションが、留学生 5.09、日本人学生 5.14 で最も高かったものの、顕著な評価の偏りは見られなかった。一方で、授業で扱った内容のうち、良かったものを選ばせたところ、日本人学生では、「岡山大学を改善するための提案（PowerPoint の発表）」を選んだ学生が最も多く、留学生においても 2 番目に多かった。この活動は、今回の合同授業において、唯一、発表テーマ決め、調査、発表資料作り、発表という一連の流れを留学生と日本人学生が全て合同で行った活動であった。それゆえ、留学生と日本人学生が、それぞれの授業で学んだことを個々に準備して発表し合うよりも、共同で作業や発表する活動に対する評価が高いことが分かった。

合同授業の回数については、7 段階評価（1：少ない～7：多い）において、留学生 3.71、日本人学生 3.94 という結果であり、今回実施した 6 回という回数が概ね妥当であったと考えられる。これは、合同授業において、ポスター発表などの事前準備が必要な活動を行ったことが影響していると考えられる。つまり、通常の授業よりも合同授業は、発表準備などの授業外の負担が増大すると言える。それゆえ、合同授業に対する満足度や評価は高いが、必ずしも回数を増やすことが良いとは考えていないのではないだろうか。

3.2 交流時の態度・異文化理解

続いて、合同授業における態度や異文化理解に関する結果について述べる。「合同授業の時、積極的に日本人/留学生と交流しましたか」という質問に対し、7 段階評価（1：全く積極的ではなかった～7：非常に積極的だった）させたところ、留学生 5.59、日本人学生 5.19 であり、積極的に授業に取り組んでいたことが窺える。理由としては、留学生においては、「話すのが楽しいし、お互いにスピーキングの練習になるから」「アイデアや考えを理解し合うため」という意見が見られ、日本人学生からは、「留学生が非常にオープンだったので話しやすかったから」「プレゼンを一緒に作るという大きな目的があったから」という意見があった。最後に行った協働での発表について言及している学生が多かったことから、協力して達成しなければならないゴールがあることで、積極性が増したと考えられる。一方で、「私の語彙力が限られているから」や「少し英語に自信がなくて、なかなか話しかけられなかった」という意見もあり、言語能力の問題で、積極的に参加できない学生がいたことも分かった。

次に、「合同授業を通して、相手の文化を学べましたか」という質問に対し、7段階評価（1：全く学べなかった～7：非常に学べた）させたところ、留学生 4.56、日本人学生 4.81 であり、両者共に、文化に対する理解が深まったことが窺える。具体的には、「折り紙の作り方を学んだ」「アメリカ、イギリスの大学の話を聞いた」という意見があり、日本人学生や留学生のポスター発表を通して、相手の国の文化について学んだようであった。

「相手の学習態度やコミュニケーション・スタイルで、勉強になったことはありますか」という質問に対しては、7段階評価（1：全くなかった～7：非常にあった）において、留学生 4.59、日本人学生 5.44 であり、日本人学生における平均値が高かった。「とにかく積極的で、自分も見習おうと思った」「何でもおそれずに質問する。内気ではないところ」という意見を書いている日本人学生が多く、留学生の積極性を評価していることが分かった。

3.3 言語使用・言語能力の向上

合同授業の際に、英語と日本語の何れを多く使用していたかを数値で知るため、便宜的に 7 段階（1：全部英語～7：全部日本語）で評価させた。留学生 4.94、日本人学生 4.19 であり、数値が高くなるほど日本語の使用が多いことを表すため、両者共に日本語を多く使用していたことが分かった。これは、6 回の合同授業のうち、3 回は、それぞれのクラスで準備した内容の発表を行ったため、日本語と英語の活動を 60 分ずつ行ったが、残りの 3 回は、協働での作業や発表であったことが関係している可能性が高い。発表に用いる言語は学習言語としたが、協働作業で使用する言語については特に指定しなかったため、留学生が積極的に日本語を用いて、コミュニケーションを図っていたと考えられる。この傾向は、相手の言語能力への評価にも、現れていた。相手の言語能力を 7 段階（1：非常に低い～7：非常に高い）で評価させたところ、留学生 4.35、日本人学生 5.88 であり、日本人学生の留学生に対する評価のほうが高かった。したがって、日本人学生は、相手の言語能力が自分自身よりも上だと判断したため、コミュニケーションの際に日本語を用いた可能性が高い。

次に、「合同授業を通して自分の言語能力が上がったと思いますか」という質問に対して、7 段階（1：全く上がっていない～7：大変上がった）で評価させたところ、4 技能のうち、留学生、日本人学生共に、「聞く」「話す」の評価が高かった。これは、今回の合同授業が、発表やインタビューなど、口頭での言語運用に焦点を当てていたことが関係していると考えられる。しかしながら、「読む」「書く」技能についても、4 点以上であったため、協働で発表準備をする際に、発表原稿をお互いに読み合ったり、書き直したりすることを通して、これらの技能の向上も感じられたのではないだろうか。また、「授業外で、発表準備や交流のため、日本人/留学生と連絡を取りましたか」という質問に対し、7 段階評価（1：全くとらなかった～7：頻繁にとった）させたところ、留学生 3.82、日本人学生 4.13 であり、連絡を取り合っていたことが分かった。したがって、発表準備のために授業外で集まったり、メールのやり取りをすることでも、4 技能が向上したと考えられる。

3.4 問題点・必要なサポート

「合同授業の時、言語の問題はありましたか」という質問に対し、7段階評価（1：全くなかった～7：非常にあった）させたところ、留学生 3.82、日本人学生 4.12 であり、両者共に問題があったことが分かった。問題があった場合にどのように対応したか尋ねたところ、「簡単な言葉を使う」「辞書を見る」「ジェスチャー」「英語（日本語）にスイッチする」などが挙げられていた。それゆえ、言語の問題があっても、様々な工夫をして、コミュニケーションを図っていたことが推察される。

一方、言語以外の問題について質問したところ、留学生は、「パートナーが積極的に話してくれなかった」という選択肢を選んだ人が多かった。一方、日本人学生は、「性格が合わない」および「価値観や興味が違う」という選択肢を選んだ人が多かった。また、「マシングントークが延々とつづいた」と書いている日本人学生もあり、両者の間に、性格や価値観に加え、コミュニケーション・スタイルの違いがあり、それが意思疎通を難しくしていることが分かった。次に、合同授業の問題点を挙げさせたところ、「日本人学生と仲良くなる時間がもう少しほしい」、「仲良くなるための時間が短い」という意見が、留学生、日本人学生共に見られ、協働作業を行う前の関係構築が不十分であったことが分かった。しかしながら、「合同授業で会った日本人/留学生と友達になりましたか」という質問を 7 段階評価（1：全く仲良くならなかった～7：非常に仲良くなった）させたところ、留学生 3.65、日本人学生 4.81 であり、特に日本人学生において、合同授業を通して、友人関係が築けたと感じていることが分かった。この傾向は、Morioka et. al. (2013) においても報告されている。留学生の積極的な働きかけを受け、友好関係を築けたと感じた日本人学生が多かったのではないだろうか。

最後に、教師に求めるサポートについては、「生徒同士が打ち解けられるようなことをしてほしい」「留学生の英語は速くて時々聞きとれないので、通訳したりしてほしい」という関係構築および言語的なサポートに関する意見が多く見られた。また、「特に重要な課題は紙などで知らせてほしい」といった教師の説明や指示の仕方に関する要望も、留学生、日本人学生共に見られた。今回のように、合同授業において、協働で作業を行い、発表する場合、どの言語を用いて、それぞれがどのような課題をやるべきなのか、また成績評価はどうなるのかなどが学生に伝わりにくかった可能性がある。また、合同授業における教師の指示についても、片方の言語のみで行われることがあったため、留学生、日本人学生、両方に的確に指示が伝わるよう、改善が必要であると言える。

4. まとめと今後の課題

本稿では、日本語クラスおよび英語クラスの合同授業の実践について報告し、アンケート調査の結果から、授業内容やスタイル、授業の効果などに対して学生がどのように感じ、何を求めているのかについて考察を行った。その結果、次のことが分かった。(1) 合同授業に対する

評価や満足度は高く、特に留学生と日本人学生が協働で行う活動が好まれる傾向があった、(2) 協働作業で共通の達成目標を示すことで、積極的な参加が促された、(3) 言語だけではなく、文化や学習スタイルに関する学びがあった、(4) 自身および相手の言語能力への評価が、言語使用に影響していた、(5) 言語に加え、性格や価値観、コミュニケーション・スタイルの違いによる問題があった、(6) 両者の関係構築および言語的なサポートを教師に求めている。

今回の報告は、少人数の合同授業における 1 つの実践例であるため、合同授業全般に関する提言を行うことは難しく、対象者や言語、授業内容によっては、学生の評価は異なる可能性がある。また、元々個別に開講されている複数の授業を合同で行うという性質上、カリキュラムや授業スケジュールなどの制約もあり、授業回数や扱える内容に限界があった。それゆえ、今後は、今回あまり扱えなかった「読む」や「書く」といった技能にも焦点を当てた様々な形態の合同授業についての実践を蓄積し、その効果や課題について分析を行いたいと考える。

引用文献

- 鈴木庸子・島津美登里 (2002) 「JLP と ELP による国際交流授業：討論とグループプロジェクトの試み」『ICU 日本語教育センター』11, pp.69-78.
- 世良時子 (2013) 「英語クラスと日本語クラスとの合同授業の試みーお互いを参加者とした協働的な学びを目指してー」『日本語教育方法研究会誌』20-1, pp.106-107.
- 守谷智美 (2015) 「留学生支援としての日本語教育の可能性」『大学教育研究紀要』11, pp.139-150.
- 安井朱美 (2008) 「留学生と日本人学生との合同授業の試みーコメントから見えてくるものー」『南山大学国際教育センター紀要』9, pp.114-128.
- Morioka, A., Uchida, C., & Fujishima, N. (2013). Collaborative lessons beyond merely a “language exchange.” 『大学教育研究紀要』9, pp.209-222.

末繁 美和・ケーレブ・ブリチャード・ジョン・ルシンスキー